

天下争乱において、細川氏は終始一貫して徳川家康味方の立場をとる。なぜか？その背景は、関ヶ原前年の慶長4年(1599)に遡る。この年、細川忠興(丹後国主)に謀叛の容疑がかけられる。姻戚関係にある前田利長と細川忠興が共謀して、家康暗殺を謀ったといふもので、両氏には討伐軍が派遣されることとなった。これに対し、細川氏は、家康に不義なき旨を伝えるため、誓詞を差し出し、家康に恭順の意を示した。さらには、忠興の三男忠利を人質として家康のもとに提出している。細川氏の恭順の意を受け取った家康は、慶長5年(1600)1月細川忠興に領知の加増を行い、豊後国速見郡・由布院(現在の大分県杵築市、湯布院)6万石を与えている。このように、慶長4年の事件をきっかけに細川氏と家康は、人質提出と領知の加増というある種の契約関係(主従関係)を結ぶに至ったのである。

関ヶ原合戦の軍事的展開は、慶長5年6月の会津遠征に始まる。家康出陣の知らせを受けた細川忠興は、即座に家康に従軍した。これは、来るべき天下争乱の事態を十分に予測した上での行動で、家康味方の意志表明にほかなかった。家康が関東に向けて出陣すると、そのすきに石田三成が上方で挙兵する。三成挙兵の知らせを受けた家康は下野国小山で評定を催し、軍勢を上方に転じ、三成と一戦に及ぶことを決意した。細川忠興は、家康味方の他大名とともに東海道を西上し、9月15日の関ヶ原合戦に参戦、軍事貢献を果たした。

東西 1600 関東九州

関ヶ原合戦 + 細川家

上方や関東で天下争乱の事態が進展する一方、九州では情報戦が展開されていた。家康より加増として豊後木付(現在の大分県杵築市)を与えられた細川忠興は、城請取りのため家老の松井康之を木付に派遣していた。九州で家康方(東軍)だったのは、豊前中津黒田氏、肥後熊本加藤氏、肥前唐津寺沢氏のみで、他は三成方(西軍)か中立(日和見ともいう)の立場をとっていた。松井、黒田、加藤氏は、互いに情報を交換しながら、上方の情勢の把握につとめた。慶長5年8月、康之のもとに通の密書が届けられた。会津遠征の途にある細川忠興からのもので、上方で石田三成が挙兵したので、すぐに丹後に帰国せよとの命令であった。康之はさっそく丹後帰国の準備を進めるが、水夫が集まらず帰国は思うにまかせなかった。そのような折、上方の最新情報を手に入れた黒田如水は、丹後がすでに西軍の勢力下にあることを知らせ、もはや帰国は無用であろうと進言した。帰国を断念した康之は、黒田氏とともに九州の東軍として、西軍の大友氏と戦うことになる。慶長5年9月13日、豊後国速見郡石垣原(現在の大分県別府市)で東西両軍が衝突。黒田・松井連合軍は、大友軍を撃破した。

松井康之は、九州における東軍の勝利に貢献したわけであるが、それは結果論にすぎない。忠興の戦略構想は飛び地の豊後木付よりも、本拠地の丹後を優先させるもので、天下争乱の事態においては、康之に丹後を守らせる計画だった。ところが、水夫が集まらないという不測の事態によって、康之は豊後木付に留まったのである。

戦後の論功行賞で、細川氏は豊前・豊後に国替えとなる。長年京都を本拠としてきた細川氏にとって、この国替は必ずしも意に添うものではなかっただろう。戦後の領知配分は、関ヶ原での軍功優位の者から順番に配分されており、軍事貢献の高かった京極高知が丹後へ、黒田長政が筑前に配された。細川氏の豊前配置は、このような他大名との兼ね合いの中で決められたものであろう。とにかく、細川氏は関ヶ原合戦を契機に、京都と決別し九州の大名として成立することになったのである。